

事ことに感かんず

子う

漬ふん

花はな開ひらけ

蝶ちよう枝えだに

満みつ

花はな謝しゃすれば

蝶ちよう還また稀まれなり

惟ただ旧きゆう巢そうの

燕つばめ

有あり

主しゆ人じん貪ますしきも

亦また歸かえる

〔作者〕干 漬 生没不詳

現実主義の詩人と称せられ、社会の矛盾を直截（ちよくせつ）に訴える作が多い。名は漬、字は子い（しい）、生卒年も生まれた場所も分からない。晩唐 懿宗（いそう）の咸通（かんつう）二年（八六一）進士にあげられ官は泗州（ししゆう）の判官に終わった。詩に巧みであったが時流を喜ばず声律に拘束されて軽浮になるのを嫌い古風三十編を作り自ら逸詩と称した。「干漬詩集」1巻がある。

〔語釈〕\*花 謝あや花が散ること \*舊 巢すうふるい巢 年数を経た巢 住みふるしたところ

〔通釈〕花が開くとこれを慕って蝶が枝に集まるが、花が散ってしまうと蝶がくることもまれである。ただ去年の燕が古巢を忘れず、主人（自分）が貧乏であるにもかかわらず、今年もまた帰ってきてくれたことは、実にうれしいことだ。

